

小山晃佑の「水牛神学」¹ ——「制度化」された神学と詩の領域——

上 村 敏 文*

抄 録

「水牛神学」で世界的には名高い小山晃佑に関して、日本の学会は全く取り上げて来なかった。いくつか理由が考えられるが、その最たるものは文体にある。日本語で書かれるものは、ほとんどすべて論文というよりもエッセイ、あるいはポエムであった。一方、英文で書かれ近年邦訳された『水牛神学』は、当然のことながら、想定している読者はアメリカを中心とした欧米の人々であったので「神学」を意識して執筆されている。プリンストン大学でルターの詩編についての博士論文を書き、欧米の神学にも通暁していた小山が、一宣教師としてタイの農村に伝道をする時には、むしろ彼らの理解しやすい言葉、すなわち仏教用語を用いてイエスを語った。この体験が、「アジアにおける神学」を展開する端緒となった。小山自身の日本語による『托鉢僧と水牛の国で』に出てくる「水牛神学」と、英文から日本語に翻訳された『水牛神学』とを比較考察することにより、小山の神学の深部に触れてみたい。

Keywords : 小山晃佑, 水牛神学, タイ, エコロジー, 神学と暴力

はじめに

『『世界の常識は日本の非常識』がキリスト教界でも妥当するのが、小山晃佑である。日本の代表的な神学者といえは『コウスケ・コヤマ』と世界の人が言うのに、日本ではほとんど誰も知らないからである。』（『神学と暴力』² 古屋安雄序にかえて冒頭より）

北森嘉蔵の『神の痛みの神学』は、世界の神学に多大なる影響を与えた書として国内外においてキリスト教関係者にはつとに知られた著作であり、英語のみならず様々な言語に翻訳されている。一方、北森の薫陶を受けた小山晃佑の『水牛神学』は著名な神学書として世界にはよく知られているが、日本ではあまり読まれることはなかった。元々英文で書かれ、原題は Waterbuffalo Theology として 1974 年に出版され、その 25 年後の 1999 年に Water Buffalo Theology³ と改題されて再版され、小山が天に召された翌年の 2011 年によろや

* Uemura, Toshifumi
ルーテル学院大学

く教文館から森泉弘次により邦訳され「逆輸入」された⁴。小山の文体は本論でも指摘するが、日本語においては生粋の江戸っ子の歯切れよさと、また一般の読者にも十分に親しみやすい平易な言葉、さらに「です」「ます」調を選択しているので、およそ神学書を読んでいるという感じがしない⁵。

1959年にプリンストン神学大学でルターの詩篇に関する解釈において博士号を取得して、その「勲章」により凱旋帰国することも出来たかもしれないが⁶、翌年の1960年に小山は日本基督教団の一宣教師として仏教国のタイに渡り（1968年まで）、そこで感じたことを徒然に綴った集積が、その後の『水牛神学』として出世作となった。しかし、実際には1965年にキリスト新聞社からすでに出版されていた『托鉢僧と水牛の国で』が、その『水牛神学』を形成するベースになっていたことは間違いない。しかし、日本の神学界で取り上げられることはなかった。

冒頭でも引用したが、海外においては「世界的神学者」として認知されている小山が日本ではなぜ「無名」だったのか、そして認められてこなかったのかについて古屋は理由を二つ挙げる。まず、「小山が語っている聴衆は主としてアメリカ人であって、日本人ではないこと」⁷を挙げている。確かにアメリカ人の中には熱烈な小山ファンが存在している。例えばメルル・モースはその代表的な人物であろう。『小山晃佑—諸文化間神学の一モデル』（1991年）という小山本人に焦点を当てた博士論文も出版されている。小山が「無名」である第二の理由として、母教会であるキリスト教同信会の中にある出版社を執筆のベースにしているからとしている。値段を低く抑えるためにソフトカバーのいかにも自費出版的な装幀が、「偉大な」神学者の書いている著作であるとは予想だにできない。『しばしあなたを捨てたけど』『愛は裏口入学ではありません』『落ちつかない夜』等々、大神学者の著作とは誰しもが思わないであろう。

小山自身も『水牛神学』序文において、「この神学の原資料は何か。聖書はどのように用いられるべきか。『アジア』はどのように神学的に定義

されうるか。この神学は西欧の神学とどのような関係にあるのか。これらの問いに『水牛神学』によって理論的に取り上げられることはない」⁸（傍線筆者）とした上で、「アカデミックな神学界における自分の位置づけにはさして関心を持たない。大学に籍を置く神学者たちは、神学をれっきとした学問分野として制度化すべく神学について権威主義的言辞を弄するならするがよい。『水牛神学』は神学（theology）—文字通りには「神を語る言葉」（God-talk）—はむしろ詩の領域に属していると確信して、言を慎む。詩人的直感と詩的表現が学問的権威を帯びた言説の埒外にあるとするなら『水牛神学』はアカデミックな特権の埒外にある位置を甘んじて受け入れなければならない」⁹（傍線筆者）と、チャレンジングな激しい挑戦状のような形で啖呵をきる¹⁰。小山の矜持は、神学とは「神を語る言葉」、すなわちポエムの領域にあると確信し、「制度化」された神学とは一線を画しているのである。

例えばミカ書6章11節「不正な天秤、偽りの重しを詰めた袋」を引用しつつ、まさに「この類の詩は神学である」¹¹とする。このような鋭い、また激しい言葉が社会学、心理学、経済学そして人間の福祉など、すべての学問分野に影響を及ぼし、関わっていくとする。そして、小山の晩年はまさにこの通りの生き方であった。政治、音楽、宗教にとどまらず果ては天文学にいたるまで、その関心の幅は広がった。単に広いというだけでなく、そこには必ず「愛」のまなざしがあった。

本論文は、日本基督教学会の年報である『日本の神学』52号（2013年）に、編集委員長でもある森本あんり氏が、「序 再び『日本の神学』を問う」の中で、海外では名前を知られている「3K」、すなわち賀川豊彦、北森嘉蔵、そして小山晃佑がほとんど取り上げられてこなかったことを指摘し、特に小山に関しては、「テーマとして取り上げられたこともない。ごく最近になって彼の著作の書評が一書かかれているが、それは彼の没後二〇一〇年のことである。小山が本学会の会員

でなかったとしても、それは彼をテーマとして取り上げなかったことの説明にはならない（『日本の神学』p. 3）と指摘する。

本論文は、「世界的神学者」小山晃佑の「神学」について、多少なりともその警咳に触れる幸いを得たものとして、森本氏に対する小さな応答、そして永眠された晃佑翁へのささやかな献呈としたい。

I. 2003 年前後における小山の「変化」

2003年3月20日、アメリカによるイラク侵攻は、小山に大きな論調の変化をもたらしたように思える。まず小山の主な著作、主要論文（エッセー）¹²を2003年前後で比較してみることに、その変化を見てみたい。

2003 年以前

- 『托鉢僧と水牛の国で』（1965）
- Waterbuffalo Theology（1974）
- No Handle on the Cross（1976）
- Mount Fuji and Mount Sinai : A Critique of Idols（1976）
- Three Mile an Hour God（1976）
- 『しばしあなたを捨てたけれど』（1984）
- 『愛は裏口ではありません』（1984）
- 『落ち着かない夜』（1985）
- 『その町が平安であれば』（2002）

2003 年以降

- 「腰掛けをひっくり返されたキリストの姿」（2003）
- 「ニネベと東京」（2003）
- 「悪人にも善人にも」（2003）
- 「逆コース」（2003）
- 「『愛国』と『愛他国』」（2004）
- 「厭離穢土欣求浄土」（2004）
- 「ゴリアトと運命を共にする偶像神」（2004）
- 「他力不思議」（2004）
- 「弓、剣、戦い、馬、騎兵によって救うのではない」（2005）
- 「箱舟から出なさい」（2005）

- 「8月15日」（2005）
- 「キリストと日本国憲法第九条」（2005）
- 「祭壇の火が口に触れた」（2006）
- 「戦争賛美に異議あり！」（2006）
- 「国籍から地球籍へ」（2006）
- 「平和への教科書—イザヤ書」（2006）
- 「キリスト信者は兵器製造に参加すべきでない」（2007）
- 「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（2008）
- 「まことにあなたは御自分を隠される神」（2009）
- 「足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから」（2009）
- 『神学と暴力』（2009）

第二次世界大戦を体験し、東京大空襲を生き延びた小山は、常に「平和」と「暴力」がその神学の基盤にあり主要なテーマとなる。最晩年の『神学と暴力』は、まさにこの集大成と言っても良い。副題に「非暴力的愛の神学をめざして」とあるように、究極は暴力によらない神学を標榜する。講演の冒頭部分を以下、やや長くなるが引用する。

「神学と暴力」という、一見奇妙な演題を掲げたのは、ほかでもありません、この水と油のような二つの理念の間には悲劇的な相互接近が事実存在したばかりではなく、現在も存在しうる危険性があるということに、わたし自身、神学者として苦しんできたからであります。神学が暴力を阻止する、あるいは阻止しようというのは良いメッセージですが、逆に神学が暴力を誘発する、人間あるいは人間集団のはらむ暴力性に点火する、しようというのは悪いメッセージです。（中略）戦争とジェノサイドとは同時に起こります。戦争とは大量殺人です。絨毯爆撃は一般市民対象のジェノサイドではありませんか。不敬虔な言い方になるかもしれませんが、あの恐ろしい空襲を経験すると、宗教の説く地獄など、これとくらべれば、怖くないと思ったほどで

した。真の神は、ペンタゴン（アメリカ国防省）に捕囚の身となっている神ならざる神とは違って、決して都会の上空で原爆を落とすようなことはしない、とわたしは確信しています。そうした意味で、わたしは神よりも人間のほうがよっぽど怖いということを、戦争体験を通して学びました。」¹³

戦争体験とは、実際に経験したものでなければ知りえないことが必ずあることであろう。筆者は戦争の直接体験はないが、イラク攻撃の戦争状態に入っていくアメリカの変化していく「空気」は実感として体験することができた。マスコミの論調、テレビなどが「愛国心」を喚起するCMなどは、戦前の「日本」がこのようであったのかもしれないと思わずにいることができないようなものであった。お茶の間の時間帯に、戦争気分を高揚させるためであろうか、今まで見たことがないような沖縄戦の映像を繰り返し流していた。アメリカの「正義」を改めて強調しているようにも思えた。

10代後半で空襲を直接体験した小山は、『富士山とシナイ山』においては、絨毯爆撃を日本の「偶像崇拜」に対しての「神の怒り」として捉えているのだが、アメリカで生活をし、アメリカの「正義」を信じていたがゆえに、イラクへの空爆に対してはアメリカの「暴力」に激しく反対した。

御長男であり牧師のジェームズ小山氏によると、「日本とは違い、アメリカでは土葬が一般的です。しかし、故人が祖国を愛し、そこに帰ることを熱望していましたので、分骨するために火葬としました。（中略）昨年六月、故人記念会後に、遺骨は多磨霊園の小山家の墓に納められました」¹⁴と記してある。小山晃佑氏の「日本人」としての最後のこだわりであった。

お亡くなりになられる前年の2008年12月インタビュービデオの中で本人自身の述懐によると、「一九四五年、ヒロシマとナガサキの年、その年の三月十日に、東京はアメリカ軍航空機による大規模な爆撃にみまわれました。わたしはその時東

京にいて、あの絨毯爆撃を生き延びたのです。あれは夜間の爆撃でした。そして朝が来て、東に太陽が昇りました。そして、光というか光明というかを見、そして太陽の暖かさを感じたのです。太陽の光線が、わたしたちの傷を癒してくださったかのような体験でした。そしてわたしは、太陽の暖かさと言の中になぜか救いを見いだしたのです。それ以来、わたしは自然界の言語が大きな意味を持つように感じています。」¹⁵

小山の同信会における生前最後の寄稿論文タイトルは「足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから」¹⁶であった。「地球市民」をキーワードとして、「エコロジー（地球環境）」を緊急な課題として提示する。その神学は『富士山とシナイ山』（教文館）以降、一貫して「暴力」（戦争、環境破壊）に対して「平和」への眼差しを有していたが、晩年は、激しい内に秘めた「怒り」を私は感じた。

『その町が平安であれば』（同信社、2002年）は『恩寵と真理』の1999年7月から2002年8月に掲載されたものをまとめたものであるが、エレミヤ29章7節を引用しつつ「事実と真理は無関係ではない」としつつ、「事実はそのままで光にならない」と、鋭く指摘する。ユダヤ人のバビロン捕囚と対比しつつ今日的なさまざまな課題を神学的課題として晩年は、「神学と暴力」¹⁷という講演を通して、一貫して戦争という「暴力」に対する激しい怒り¹⁸と、相克する「平和」への眼差し、あるいは祈りがあった。

小山の基本的な神学に対する姿勢は変わらないが、2003年のイラク戦争を機に、アメリカの戦争（暴力）にたいして、またそれに伴う環境破壊にその神学的視座が大きく変化したように思う。

II. 「水牛神学」（ポエム）と『水牛神学』 小山の文体

本題に入る前に、外形的なことではあるが重要なことは小山の文体である。小山自身が日本語で執筆する場合はほとんどが「です」「ます」調の

日常語である。引用、参考文献など論文形式を取らず、本人も自覚的に「神学者」ではなく、一般人をその読者として想定している。

小山の神学が「神学」ではないという「批判」¹⁹は、論文形式を取らない散文、そしてポエムであるために、日本語圏においてはなかなか神学論文の対象になりにくい点があった²⁰。「水牛神学」の冒頭は、「托鉢僧」への率直な思いに続き、「水牛」の散文詩が目次の前に掲載されている。全文を示してみたい。

水牛

水牛の顔をじっとみていると、
仏教の僧侶たちの説く
「カルマ」に
お目にかかったような
不思議な気持ちになる。
こんなのにっそりした
顔の筋肉の動きののろい
動物と、私は今まで
知り合ったことがない。
その無表情さ
それがあの「カルマ」
——無表情な因果律——
の世界を
思いださせるのだろう。
「カルマ」の顔の筋肉の動きが早いとしたら、
もしそんなことになったら、
「カルマ」が「カルマ」たるたしかさがなくなる。
無表情に
永遠の法則によって
人の運命を支配する原理
——たとえそれが二十四時間でも、
十億年でも
であるためには
私情を入れてはならない。

水牛は、
その目付き、顔形ちともに

草をたべていようと、どろの中にねころんでいようと、
——「私情はいれません」といつてるよう。
仏教国タイ国には
しっくりした動物だ。
こんなことを思うのは
私だけだろうか²¹。

小山の文体、そして力の抜けた「水牛神学」の真骨頂がここにある。仏教国タイにおいては、アウグスティヌスもバルトも、ルターも語らない。否、イエス・キリストも、おそらくは意識的に入れてはいない。「批判」されるとしたらここに原因の一つがあるであろう。さらにできる限り、タイ人の言葉と、彼らが馴染んでいる仏教の用語を用いている。

一方、英語から翻訳された『水牛神学』のまえがきは、一部に過ぎないが、以下の通りである。

神学の文脈的構造化は二つの重要な運動を含意する。第一に、イエス・キリストを文化的に適切な、そして的確に意味を伝達しうる言葉を用いて表現すること。第二に、もしも文化がイエス・キリストの御名が象徴する真理に逆らうとわかったときは文化を批判し、改革し、退位させ、反対すること（中略）神学の、文化との関係は相対的（時間的）であって、絶対的（永遠的）なものではない。地域における神学(theologia in loco)を部族的神学から峻別する要素はこれである。神学はこれら二つの運動〔時間的及び永遠的〕への参与を怠る時部族神学に墮す。そして神学のグローバル化は部族神学の土台の上に構築させることはできないのだ。この種のグローバル化はネオ帝国主義の安っぽい練習にほかならない。人類史を養い育てるのは地域における神学であって、部族神学ではない。

こういう文体、論調であれば、我々は見慣れているし、「安心」もする。小山は初版のまえがき

に、第一コリント9章22節以下を引用し「わたしは弱い人々には弱い者になりました（以下略）」を地で行っているのである。アメリカ人に向けて執筆された『水牛神学』は、自ずと文体も、論調も大きく異なっている。

Ⅲ. 「水牛神学」と『水牛神学』の対比

キリスト新聞社より出版された『托鉢僧と水牛の国で』²²の小山の日本語による翻訳ではない「水牛神学」と、森泉弘次が翻訳した『水牛神学』本文を以下、限定的にはあるが対比しつつ取り上げる。

「水牛神学」は、『托鉢僧と水牛の国で』の目次の大項目の「水牛の友」の冒頭に登場してくる。ちなみに、目次の大項目は章立てというよりも、自身の様々な体験から特に脈絡なく構成されている。「タイ国」「サワディー・クラブ（今日は）タイ国」「生きている北タイ」「僧侶とキリスト」「水牛の友」「背の高いヤシの木の下で」「あとがき」と7つの項目があり、それぞれに小山独特の感性の小項目が続いている。ちなみに「水牛の友」においては、以下のような項目が続いている。

- ・水牛神学
- ・「ジャイ・イエン」
- ・光あれ 自己重要視病
- ・最後だから親切にしてやれよ
- ・血なまぐさいプラカード
- ・百姓化
- ・市場における神の栄光

(1) サワディー・クラブ（今日は）タイ国

私はこのバンコック第一夜なにげなくエレミヤ記を読みはじめました。「祭司たちは『主はどこにおられるか』といわなかった」（二の八）との御言が私の心につきささるようになりました。（中略）しかし私は「主はどこにおられるか」と問いませんでした。私は伝道的手段、方法など一人で論議しました。（中略）

この御言が私を上から二つに切りさいたようでした。「主はどこにおられるか」に無関心で一体何の伝道でありますか。（p. 24）

タイに意気揚揚として上陸し、宣教の大志に燃える小山の伝道（論）²³の最初がエレミヤ2章から始まっている。タイ語の習得を夫人と共に1年間準備し、その中でいろいろな出会いを体験する。神学書もほとんどない中、仏教国においてどのような「方法論」で宣教をしていくかといろいろと構想を練っているさ中、一つの決定的な出会いがあった。「あるタイ・インテリとの対話」であった。この小見出しの中で小山の今後、そして将来を「運命付ける」重要な記述が登場する。

私がキリスト教反対、きらいなものには二つの理由があります。まず第一にどうもキリスト教は神、神とのべついつてます。そこからして、神の存在というようなことをあなた方は信じているらしいですね。神がないということになりますとキリスト教はベチャンコにだめになってしまうのではないのでしょうか。神の存在に一さいをかけた宗教など私はごめんです。（p. 35）

小山は「神学は言葉に注意深い」²⁴と言っているが、このタイ語での対話を、細大漏らさず的確に日本語に記録しているところが、「小山神学」、そして他宗教との対話の原点になった。そして、「なかなか興味深いご意見です。第二のきらいな点はなんでしょうか。」（p. 36）と、きちんと次の論点を聞き出すことを忘れていない。

キリスト教は血なまぐさい宗教です。私たちタイ人は血なまぐさいことは一切きらいであります。仏もおしえていますように、殺生はよくありません。（中略）小山さんにはお気の毒ですが、神の存在と十字架のむごたらしい殺生をキリスト教が説くかぎりキリスト教の将来はこのタイ国ではまずないでしょ

う。」(pp. 36-37)

小山の宣教は、痛烈な、そしておそらくタイの人々の代表的な意見を聞くことからスタートした。そして、「聖書およみになったことがありますか。」との小山の問いに、このインテリは新約聖書を読み、また山上の垂訓などすばらしい教えがあることもある一方、わかりにくいことがたくさんあることを指摘している。そして、間髪を入れず、質問者小山に「あなたはどのていどトリピドク（仏教経典）をおよみになりましたか。自分だけの方に真理ありと主張するのはあやまっています」という鋭いカウンターパンチに小山は、

「……………」(p. 38)

この空白が、「小山神学」の大いなるスタートでもあり、生涯を通して他宗教を真摯に学ぼうとするきっかけになった。

(2) 「水牛神学」

以下、小山自身の日本語による「水牛神学」である。

日曜日の朝、チェンマイの郊外、田舎の教会に説教に行く道、私はいつも何頭もの水牛が田んぼの中にねころんでいたり、草を喰べていたりするのをみます。このあたりまえの景色が私にある重大な注意をうながしてくれるのです。私がこれから説教をしにゆく教会にあつまってくる人々はこの水牛たちといっしょに田んぼで働いている百姓さんたちだ。だから私はそのひとたちにわかる言葉で、わかるように話をしなくてはならない。文章は簡単で短く、はっきりしたものでなくてはならない。抽象名詞はさげよう。義認、聖化、啓示、歴史、選び、などというかわりにタカラクジ、お米、犬、猫、自転車、アヒル、ブタ、腹痛、蚊、雨、葬式というような「重味のある言葉」—百姓さんたちにとって一を

用いてキリストを伝えなくてはならない。しかもただわかりやすく話をしただけではだめだ。福音を曲げずに語るのではなくてはだめだ。水牛さん、忠告ありがとう。(pp. 159-160)

一方、『水牛神学』における森泉弘次氏の同箇所の小山の英語からの邦訳は、以下のようになっている。

遣わされた田舎の教会へ行く途中、どこでも必ず眼にしたのはぬかるみの水田で草を食む水牛の群れである。これはわたしにとって感動的の光景だ。なぜか？ わたしがキリストの福音を届けに行こうとしている人々が、これらの水牛と一緒に持てる時間のほとんどを稲作水田で過ごす民であることを、その光景は思い出させてくれるからである。水牛たちは無言のうちに教えてくれる。わたしはこれらの農民に単純な構文と発想によって福音を伝えなければならない。抽象的な観念を捨て、手で触れられるような具体的なものを用いて伝道せよ、と。「ねばりけのある米のめし」、「こしょう」、「犬」、「猫」、「自転車」、「雨季」、「雨漏りする家」、「魚釣り」、「闘鶏」、「富くじ」、「腹痛」。彼らにとって意味深い言葉はとりわけこの種の語群だ。「よし、今朝は闘鶏の譬えを使ってキリストの福音を伝えてみよう」、そうわたしはわが心に囁く。

古屋安雄氏は『托鉢僧と水牛の国で』（キリスト新聞社、1965）と、その9年後にアメリカで出版された『水牛神学』は「内容はほとんど同じであった」²⁵と、指摘しているが、本質的な「内容」は変わらないが、その文体の差は、アメリカ人を念頭に書かれた英文を日本語に翻訳したものと、小山自身が日本語で書いたものには大きな「形式的」差がある。

「水牛さん、忠告ありがとう」という最後のセンテンスに、小山のセンスが輝いている。

(3) 北タイの「主の祈り」

タイでの宣教師、牧師、神学校教師としてのさまざまの働きの中で、小山がもっとも腐心したのは、言葉の問題であった。本人のルター、バルト、ボンヘッファーを始め欧米の神学者、そして歴史神学についても豊富に学んでいたにも関わらず、「私は内村さんやバルトよりもあの田んぼの中で水牛を追いかけている百姓さんに優先権をあたえる」²⁶と、かたく決めており、神学書も何もないところでの宣教における用語法は小山の言語感覚を一層磨く場となっている。

北タイでの「主の祈り」の一部を以下紹介する。

「御国がきますように」とは家長のいうことをよろこんでしますように。神のいうことを皆よろこんでしますようにということです。そうしたら平和がでてき、よろこびがでてきます。神の御国とは神に従う大世界家族のことです²⁷。

もし、これがたとえば現代の日本やアメリカであつたら、違和感を覚える人もいるかもしれない。しかし、1960年代の国王をいただく仏教国において、どのように神の御国を理解してもらうことができるかという、きわめて地域限定的²⁸な小山の表現として農家の方々に解説を試みるのである。小山は思いついたように詩を吟じてもいる。そして、この単純な詩の中に小山「アジアにおける神学」がある²⁹。

ネハン独語

十の欲があれば
十の苦しみがある、
五つの欲には
五つの苦しみがある、
三つには
三つ、
二つには
二つ、

一つには
一つ、
……そしたら
欲がゼロになったら
苦しみもゼロになる。

救とは、ほかでもない
苦しみゼロになること。
忘れてならないのは
「一切の苦しみの根源は
欲なり」との判断、そして
その二者の間にある
するどい、しかも
簡単な
ホトケの方程式である。

(中略)

ネハンをめざす者に
なによりも大切なことは
人の世から離れて
——出家して——
経典の教えているように
「曠野にさまよう
一匹のサイのようになる」ことだ。
俗世界をすてて
孤独になれば、
ローソクの炎を下火にし
心の平静を保ち、
ネハンに近づくことができる。

俗人と共に生きると
五つの欲が七つになる、
七つの欲が九つにふえる、
九つの欲には
当然
九つの苦しみがある。
共に生きるのではなく
「一匹のサイ」になること
これこそ、まことに
ネハンへの道である。

それにしてもこのあいだ
日本からきたキリスト教の宣教師が
——風変わりな日本人だ——
「共に福音にあずかるためである」
「共に福音にあずかるためである」と
くりかえし、また、くりかえし
説法していた。³⁰

タイの人々が日常親しんでいるホトケを意図的に援用することが「水牛神学」の方法論である。一方、『水牛神学』においては、「アリストテレスの胡椒と仏教的塩」、「仏教（Buddhism）ではなく仏教徒（Buddhist）に焦点を置く」に発展的に大きく深化した「神学」となっている。タイに来たばかりの時には、強烈なアンチキリストの「洗礼」を受けていたが、「仏教」という教義ではなく、その教えに従って生きているタイの具体的な人々、すなわち「仏教徒」に関心が移っていく。そして「厭離穢土欣求浄土」（『恩寵と真理』、2004年2月）の冒頭論文にその考えが集約される。すなわち仏陀の深い宗教体験として、「他人を責めるのではなく、自分をよく見なくてはならない。病気がある。戦争がある。人種差別がある。宗教戦争がある。金持ちが貧乏人をくいものにしていく。飢餓がある。理由のわからない苦しみがある。生老病死。穢土だ」、「心さえ浄土ならこの穢土も浄土だと思う。心浄土浄。新約聖書の言葉は浄土でなくて『神の国』。『み心の天になるごとく地にもなさせ給え』は地を重要視している。『欣求浄土』はこの祈りと言い換えてもよいかと思う」。この短い冒頭言に、1960年のタイ宣教からの集約がある。さらに親鸞へと発展する。「他力不思議」（『恩寵と真理』2004年4月）に『他力不思議にいりぬれば義なきを義とすと信知せり』（浄土和讃）を引用して「『不思議』ということは自分の計らいでなくミダブツ（彌陀佛）の計らいということ。それは私たちの造作をはるかにこえたものであるという。救いは他力であって自力ではない」。小山がしばしば引用する徴税人ザアカイ（ルカ19：1-10）に対して、「イエスさまの

全く予期しない声」を「他力不思議」として、また「放蕩息子のたとえ」（ルカ15：11-32）も、放蕩の限りをつくして帰ってきた予期しない出来事を「他力不思議」として把握している。「異教国と呼ばれる日本で七〇〇年以上前に、すでにこのような深い宗教体験の発表があった。法然、親鸞を研究した西欧の神学者たちは、ここにはないものはイエス・キリストという名のみで、信仰思想はきわめてキリスト教的であると言っている」と、締めくくる。小山の眼は、日本に戻ってきた。

IV. 「発展的」可能性 エコロジーと神学

小山の中心的視点の一つは、終始一貫「平和」への眼差しであった。『その町が平安であれば』（同信会、2002年）には、その真髓がさまざまな角度から論ぜられている。しかし、大きな変化が発生したのが、9.11以降からイラク侵攻に至る「変容」するアメリカ社会であった。

ルター、北森、プリンストン、タイを経由して「焼け野原」（東京大空襲）の日本に戻ってきた。『富士山とシナイ山』（教文館）の原点である、アメリカのB29の空爆による焼夷弾の火の海を、小山は「神の怒り」と捉えたが、イラク攻撃は「暴力」として激昂する。そしてアメリカに永住権を得ながら、日本の武蔵野に眠ることを選択された。「怒り」「哀しみ」そして「和解」が混濁した晩年であったように思う。今回の大統領選をご覧になっておられたら、どのような「神学」を展開されたであろうか。小山の死は、ニューヨークタイムスにも異例とも思われるスペースで掲載された。まさにアメリカの神学界だけではなく、プロテスタントを基調とする市民社会からも受容されたということであろうか。

小山師とのインディペンデントスタディー（対話）を通して、同信会とのつながりも出来、「恩寵と真理」にも連続して以下、「古神道からキリストの道へ」（2003年11月）、「キリスト教と日本」（2004年12月）他と、毎年のように執筆と学びを深める機会をいただいた。

小山師の私への最大の関心は神道であった。しかし、この時期はまだ私自身、明示的に神道理解ができていたわけではなく（もちろん現在でも到底できているとは言えないが）、また「国家神道」と「古神道」の非連続性、連続性についてどのように言語化するための準備ができていたわけではなかった。単純に現枚方神社宮司の中東弘氏が「神道はエコロジー」という一点で周回の説明をしようと試みていた。小山自身はすでにエコロジーに関しては早い段階でその意識を持たれており、『水牛神学』の刊行二十五周年記念版へのまえがきの最後に「『水牛神学』はエコロジー神学の予表である」³¹と明言されておられる。「地球という惑星のエコロジー的健やかさの保持という課題と真剣に取り組んでいないエキュメニズムは、狭い部族的利害を動機とする運動として人類社会の信用を失い、拒否されるであろう。キリスト教信仰は地球という惑星の生命と生きとし生けるものの生命との緊密な連帯関係という視座から表現されなければならない」³²と、締めくくる。

「水牛神学」は、「水牛の友」の項を以下の散文詩「市場における神の栄光」で閉じられている³³。

市場における神の栄光

チェンマイから七〇キロほど
北に行った小さな山間の村に
静かに朝が
しのびこんでくる。
方々の農家から
色とりどりのものをかついで
村の市場に人々が集ってくる。
まだうすぐらい朝の五時半
村に唯一のキリスト教の会堂から
心ちよい冷たい空気を吸いながら
私も市場に見学、散歩にいつてみる。
市場の入口では
茶色の蛙をザルに入れて
売っている老人が
ゆっくりとキセルの煙をゆらゆらさせつつ

ムシロの上にぺちゃんとして坐っている。
メダカを新聞紙の上に
キレイに十匹ほど並べて
売っている少女
日本流にいえば
おつけのだしにでもするのだろうか。
(中略)
人々は楽しそうに
気楽に話しあう
そのあいまあいまに
値切りの論争と
笑声がきこえる。
市場をとりかこんでたっているヤシの木たち
ちは
もう何十年も
この人間たちのサワギを
聞いたことだろう。
この小さな村の市場の中を
ぐるぐる歩いてみて
私もこの人々
この社会の一員になったような
そして
なんとなく人間生活の根底に
ふれた気がした。
生きていることは
何とすばらしいことではないか
人々とまざること
そしていっしょに
歩くこと
見ること
感じること
考えること
さわぐこと
これは神の特別な恵み
平和ではないだろうか。
神がこの小さな村をあたえ
そこにすむ人々を愛し
必要なものをあたえ給うこと
カエル、ナマズから
「カオー・シャンプー」まで

そして私が今朝
人々と共に
ブタを見
アヒルを見
平和なサワギを聞くことのできたこと
そのことを
神に感謝しつつ
私は宿舎にかえった。

おわりに

「吾死なば郷里の山に埋れて 昔語りし友と夢みむ」³⁴というお別れの言葉が、終焉の地となった東海岸マサチューセッツ州スプリングフィールドの自宅仕事場2階の机におかれていたという記事が『恩寵と真理』（2010年3月号）の冒頭口絵の最後に掲載されている。「小山晃佑記念号」として通常は35頁前後の小冊子が、「特別号」として91頁にわたりさまざまな方々の思い出、追悼文が掲載された。アジアの伝統とキリスト教がいかに両立できるかということを、宣教師としての豊富な経験をもとに、特にその優れた「比喩」の持ち主として冒頭に紹介されている。この天性の「比喩」と「ポエム」による日常語の展開が、欧米の論調に基調を置いてきた日本の神学界で取り上げられることはなかったことの原因になるであろうか。

日本人としてはもちろんアジア人としても初めてニューヨークにあるユニオン神学校の教授としてエキュメニカルな講義を担当され、名誉教授号も授与された。生涯を通して仏教の研究をライフワークとして続ける一方、ユダヤ教、イスラームなどとの積極的対話、そして晩年は神道についての理解を深めようとする真摯な姿勢を示された。分骨をして日本の大地に、小山家のお墓にあえて就眠されることを選ばれたことに、「日本人」としてのこだわりを垣間見ることができる。

しかし、神道に関しては残念ながら時間が足りなかった。シンプルなようで、複雑な体系を持っている神道は、歴史において仏教、儒教、道教、ゾロアスター教そしてキリスト教等さまざまな宗

教からの影響を受けているからである³⁵。国学者、本居宣長だけを取り上げても一生かかってしまう程の研究が必要であるが、幕藩体制下における日本化していく儒教、徳川光圀に始まり明治39年に完成した『大日本史』を中核とする、いわゆる「水戸学」の研究も戦後ほとんどなされなくなった。さらに古事記、日本書紀、万葉集から中世の神道史までカバーをすると一人の研究者の努力だけでは到底達成することのできない広がりや深さが要求される。仏教を基調とされた小山師にはこの時間は残されてはいなかった。タイ以上に、おそらく世界でもっとも宣教の難しい国である日本宣教を考える上で、以上挙げた神道の基礎的研究は不可欠である。今回は十分に論考できなかったが、エコロジーの課題はおそらく人類共通の喫緊の最も重要なテーマになり、小山も最終的な視点もここにあったのではないだろうか。

<小山晃佑師への献呈詩>

毎週、金曜日
ミネアポリスご自宅での
インディペンデントスタディ

とにかく愉しかった！

豊かな午後のひとときが、
その愛くるしい
まるで少年のような
キラキラとした目の輝き
どんな話にも
好奇心いっぱい
耳を傾ける。

時には、陽が傾き
さりげなく ロイス夫人が
軽食を出してくださる。
リビングにはグランドピアノがあり、
窓から見える緑豊かな公園が
尽きない会話を
見守ってくれている。

至福の時！

ルターを愛し、
アウグスティヌスを
トマス・アクイナスを
ティリッヒを
バルトを

しかし、タイでは
お百姓さんを
お坊さんを
水牛を
ウシガエルを愛した

今は、静かに
多磨霊園にねむっていらっしやる

きっと
ニコヤかに
微笑みをたやすことなく

今でも
あなたの
少年のような瞳が、
しずかに
語りかけてくる

ありがとうございました。

(追記)

小山氏と直接交流した多くの人々は国籍を問わず、一様にその偉ぶらない慈愛に満ちた在りし日のさまざまな体験を綴られている。今回、小山晃佑氏との晩年の出会いを通して、『水牛神学』を代表とする「アジアにおける神学」³⁶を踏まえたうえで、その焦点を2003年以降論じてみたが、この試みは世界的に活躍された「小山神学」を十分に論じているわけではない。英文で書かれた膨大な論文も視野に入れなくてはならない。しかし、

やはり今後の焦点は「日本」である。最も宣教が難しいといわれている風土である。小山だけにとどまらず、日本で「神学をする」意味を考え、仏教国タイ以上に宣教の困難を経験している日本の宗教風土を再考する上で、「水牛神学」はおおいに参考になる。「アメリカ人」になる可能性もあったにもかかわらず、「アメリカ人」とはならなかった、あるいはなりきれなかった小山の晩年の微妙な意識変化は、今後の日本宣教論に賦与することが多い。

*この論文は、2014年日本基督教学会第62学術大会（関西学院大学）で口頭発表「小山晃佑の晩年の神学からの発展的可能性についての考察」に加筆修正したものである。

注

- 1 「水牛神学」は、小山晃佑自身の日本語著述である『托鉢僧と水牛の国で』（キリスト新聞社、1965年）、『水牛神学』は森泉弘次の翻訳（教文館、2011年）と本論文では区別することを前提とした。「水牛神学」はポエムが効果的に使われている。
- 2 小山晃佑の講演「神学と暴力」（2006年9月8日、日本基督教団霊南坂教会）をベースに、2002年から2006年にかけて『恩寵と真理』などで執筆したものを中心とした論集。
- 3 同書前書きに、小山自身が記しているが、「著者としてはもうひとつしっくりこないが、英語はわたしの母語ではないので受け入れるしかなかった」p. 3と書いているように、初版ではWaterbuffaloと単語が繋がっているのに対して、再版ではWater Buffaloと2語に分かれている。
- 4 新渡戸稲造の『武士道』、内村鑑三の『代表的日本人』、あるいは岡倉天心の『茶の本』と比定することは出来ないが、神学の世界では同じくらのインパクトが少なくとも英語圏にはある。アフリカのタンザニアにあるルーテル系大学の一つを訪問した時、学生がこの『水牛神学』を熱心に読んでいたのには驚いた。欧米やアジアだけではなく、アフリカのキリスト教界にも広く浸透し、愛読されている。
- 5 筆者もルーテル学院大学の学生と共に全文翻訳を試みたことがあるが、英文は一般の日本人が読むにはやや難しく、やはり外国語としての英語の意識があるためであろうか、やや堅い印象があるので、小山の平易な日本語とのあまりの相違をどのように埋めていけば良いの

- かが課題であった。森泉はそこら辺の塩梅を大変うまく翻訳されている。小山を直接知っている方の中には、例えば起居を共にしたこともある石橋常久（日本キリスト教団紅葉坂教会牧師）が、小山翁に対しての手紙という形式の中で「訳文が堅く、言葉が難しいという印象が残ります」（『本のひろば』（2012年1月号））としている。確かにその通りではあるが、森泉の翻訳は小山の文体の英語と日本語のギャップを最大限埋めているので、筆者は優れた翻訳であると評価し、また感謝したい。
- 6 同時期プリンストンにいた古屋安雄氏によると、小山は様々な「挫折」を体験している。あるいは「試練」と言い換えた方が良いかもしれない。帰国後、小山はタイ北部の農村地帯に「神学者」としてではなく、日本基督教団世界宣教協会委員会の一宣教師として派遣されている。本人自身は「タイ国在住同労者」として自著している。
 - 7 小山晃佑『神学と暴力』教文館、2009年 p. 6。古屋安雄が、「序にかえて」の中で詳述している。
 - 8 『水牛神学』 p. 8。
 - 9 『水牛神学』 p. 9。
 - 10 小山の魅力は、普段の会話では穏やかで柔和、笑みを絶やさないのであるが、突如として「神がかり的」にまるで「預言者」のように語り出す時がある。こういう時は、余人もその中には入ってはいけなような迫力がある。まるで休火山が爆発するかのように、まったく別人となる。筆者は、何度かそういう場面に接することがあった。セントポールの Luther Seminary での特別講義も同様であった。
 - 11 同書、p. 10。
 - 12 日本語で書かれる場合はほとんどが『恩寵と真理』への寄稿である。
 - 13 『神学と暴力』冒頭 p. 22 より。
 - 14 「二〇〇九年、父の日にあたり（説教からの抜粋）」（小山栄一訳）、『恩寵と真理』1115号、pp. 78-79。
 - 15 『恩寵と真理』1115号、p. 10。
 - 16 『恩寵と真理』1104号、2009年4月。
 - 17 2006年9月8日、日本基督教団霊南坂教会での講演。その後、2009年に「箱舟から出なさい」（『恩寵と真理』2005年4月）、「キリストの福音と地球史四六億年」（2006年8月30日、キリスト同信会中野パークサイド教会での講演）などと合わせて、『神学と暴力』（教文館、2009）として出版された。
 - 18 イラク戦争に突入する前後、愛車に Do not attack Iraq とステッカーを貼っておられた。晩年小山氏が在住したミネソタ州ミネアポリスでは、小山だけではなく、多くの市民が車や自宅の前に戦争反対の意思表示をしていた。ベトナム戦争の反戦運動を上回るとも言われる戦争反対の運動があったにも関わらず、日本でも、またアメリカ国内でも新聞、テレビなどはほとんど取り上げることはなかった。
 - 19 岩橋常久「小山神学は神学か」『福音と世界』2010年4月参照。
 - 20 すぐに気が付くことであるが、母国語である日本語と、外国語としての英語での文体、論調は明らかに異なる。ここでは小山の実践的「神学」を論ずることになるので、日本語による本人自身の著作に関しては原文のまま引用することを原則とする。
 - 21 同前書『托鉢僧と水牛の国で』に続く散文詩。pp. 4-6。
 - 22 小山晃佑『托鉢僧と水牛の国で』（キリスト新聞社、1965年）。
 - 23 (論) については()を付けた。以下、さまざまな(論)が出て来るが、小山の独特の感性による言語感覚、そして「比喩」が中心となるので、いわゆる神学論とは距離があるということを意識するために()を付与した。
 - 24 筆者がインディペンデントスタディーを一年にわたって、小山氏の自宅で毎週金曜日午後1時に伺っていた時、すべてが対話であった。このタイ人のインテリとの対話でもそうであるが、小山のスタンスは徹底的に相手の立場を尊重し批判はしない。このタイのインテリとの対話が、将来の仏教との対話とのきっかけになっていることに注目したい。仏教に対する尊重と研究はここから始まっている。
 - 25 小山晃佑『神学と暴力』教文館、2009、pp. 4-5。
 - 26 小山前掲書 p. 161。
 - 27 同書 p. 189。
 - 28 『水牛神学』は、第一コリント書9章22節以下、「わたしは弱い人々には弱者のようになりました。弱い人々を得るためです。すべての人々に対してすべての人々のようになりました。なんとかして何人かを救うために。わたしがこうしたことをあえてするのは福音のためです。他の人々と共に福音に与るためです」から始まっている。ルーテル学院大学で「日本の宗教風土」を非常勤で担当した時、当時キリスト教文化コース主任であった柴田千頭男現名誉教授が同じ箇所を挙げて、学生の前で大きな声で朗読されておられたのを思い出す。伊勢神宮など、諸神社における神道との対話の始まりであった。
 - 29 『水牛神学』は英文においては、欧米神学に対して「好戦的」にあえて書いている。日本の神学界を念頭にチャレンジしているのかもしれない。初版前書きにも、「わたしは決心した。トマス・アクイナスとカール・バルトのそのような偉大な神学思想を、北タイの農民たちの知的および霊的必要の下位に置こう、と。」（『水牛神学』初版まえがき、p. 17）そしてこの、「決心」はいくつか重なり、「神がわたしを伝道の器として召したのはここ

北タイであって、イタリアでもスイスでもないからだ（中略）農民との深いかわりゆえに、わたしはこの決断をしたのだ」（同書、pp. 17-18）しかし、これも小山自身が日本語で書いたとしたならば、間違いなくユーモアに富み、日本に配慮した表現となったことであろう。

- 30 『托鉢僧と水牛の国で』 pp. 97-104。
- 31 『水牛神学』 p. 13。
- 32 同書 p. 15。
- 33 『托鉢僧と水牛の国で』 pp. 179-184。
- 34 この「辞世の句」は西田幾多郎の引用である。晩年は、特に西田の文章を熟読玩味されておられ、「自分の言語（日本語）で西田が読むことができるのがうれしい」と常々語られておられた。
- 35 特に禁教が厳しかった幕末に、平田篤胤が漢訳聖書をもとにその「神学」を形成していたことは、歴史学において村岡典嗣により実証研究が精緻になされている。
- 36 「アジア的神学」(Asian theology) と、「アジアにおける神学」(Theology in Asia) については、『水牛神学』において明確に区別されている。後者を選ぶ理由として「ガラテヤにある諸教会」(Church in Galatia)、「ローマにいる聖徒たち」(the saints in Rome) が念頭にあった。『水牛神学』 p. 7 参照。

Kosuke Koyama and *Waterbuffalo Theology*

Toshifumi Uemura

Kosuke Koyama is one of the most famous and well known theologians overseas. Simultaneously, he is one of the least famous or “unknown” Japanese theologians in Japan. Even though he is so well known overseas he has been neglected by the academic community in Japan. To analyze the reason for this, I have taken up *Waterbuffalo Theology*, which is the book that has made him well known around the world. It was written in English and translated into Japanese. I compared the two translations having the same title, but found them to be different in writing style. In Japanese, *Waterbuffalo Theology* is not simply an academic work, but rather a collection of essays and poems. However, the essence of Koyama's theology lies in his unique identity as a Japanese. Koyama preferred using the style of essay and poetry. He argued that through poetry the true worth of things would appear.

Keywords: Kosuke Koyama, Waterbuffalo Theology, Thailand, ecology, theology and violence